

# しあわせのかおり (幸福的馨香)

2008(平成20)年8月26日鑑賞(東映試写室)

★★★



監督・脚本＝三原光尋／原作＝三原光尋『しあわせのかおり』(幻冬舎刊)／出演＝中谷美紀／藤竜也／田中圭／八千草薫(東映配給／2008年日本映画／124分)

## 第3章

意外な設定が興味をひく

……最近親子間での殺人事件が増えているが、実の親子でなくても料理を通じたこんな父と娘の愛の姿が！ 会社を辞めて小上海飯店に弟子入り。そんな子持ち女の決断はすごいが、頑固おやじのやさしい眼差しもグッド。料理は心でつくるもの。そんな実感がジワジワと広がってくる。困るのは、あの蟹しゅうまいもトマトの卵炒めも観客は食べられないこと。したがって、空腹時にこの映画を観るのは厳禁……？

### 舞台は小上海飯店

私は去る8月22日～24日に行われた上海での出版打ち合わせから帰ってきたばかり。そんな私が8月26日に観た映画『しあわせのかおり(幸福的馨香)』の舞台は、「小上海飯店」。といってもこれは上海にある店ではなく、金沢駅から北西約5 kmに位置する大野町という港町。したがって私は行ったことのないところ。

映画の冒頭、店主である王慶国さん(藤竜也)がつくる料理が次々と客に出されていくが、それを見ているだけで思わず生ツバが出そう。小さな店だがテーブルは5～6卓あるから満席になるとかなり忙しそうだが、お客はみんな幸せそうな顔で王さんの料理を食べている。今回上海の老洋房や山間堂で食べた高級上海料理もおいしかったが、金沢市大野町にある庶民的な「小上海飯店」の庶民的な料理もおいしそう。

ちなみに「小上海飯店」の名物は蟹しゅうまいだが、その隠し味は……？ そのヒントは、王さんの出身地が紹興だということだが……。

## これって仕事？ それとも自分の楽しみ？

山下貴子（中谷美紀）が「小上海飯店」を訪れたのは、デパートへの出店交渉のため。つまり、「小上海飯店」の味はもっとデカイ市場でも必ず通用すると確信している会社の方針に従って、貴子はその交渉にあたっているわけだが、職人氣質の王さんの説得は難しそう。実際貴子が出店の話を切り出すと、すぐに「帰ってくれ！」ときつい言葉が返ってくるだけ。

そこで貴子が次に考えた戦略(?)は、客として店に通い、山定食、海定食を毎日食べること。毎日手をかえ品をかえて貴子の前に出される昼定食の充実ぶりと、それをいかにもおいしそうに食べる中谷美紀の表情がこの映画前半のハイライト！ それにしても、これって仕事？ それとも自分の楽しみ？

## 貴子の決心は？ 王さんの対応は？

そんな貴子の姿を見ていると一見堂々としたキャリアウーマンのようだが、実際には一人娘を育てながら会社勤めをしているよう。映画中盤からは貴子の離婚事情や、なぜ今金沢で生活しているのか、などの事情が明らかにされていくからそれにも注目！

この映画のストーリー形成の核は、ある日厨房に立った王さんが倒れた後、貴子が会社を辞めて王さんに弟子入りという一大決心をするところ。そのきっかけは、病院に見舞いに行った貴子が「蟹しゅうまいの作り方を教えてください」と言ったことに対して、「それはできません。ただし、弟子入りしたら教えましょう」と王さんが答えたこと。もちろんこれは、父と娘のような温かい気持ちで結ばれ始めた中で、王さんが冗談として言った言葉だが、貴子はそれを真に受けてしまった……？ いやいや、一人娘をかかえて女一人生きていくことのしんどさを知っているはずの貴子が、そんなバカな受けとめ方をするはずはない……。

ところが、ある夜、小上海飯店を訪れた貴子は、突然「弟子入りをお願いします」と宣言したから王さんはビックリ。さて、貴子がそんな決心を固めたのは一体なぜ？ また王さんはそんな貴子をどう受けとめるの？

## 失敗は成功のもと

中華鍋はデカイし重いから、女性が左手一本でそれを握り振るのは大変。しかし、それは中華の料理人となり王さんの跡を継ぐためには避けて通れない試練だから、左手にマメをつくり血を流しながら貴子が必死で頑張ったのは当然。それを支えたのが、小上海飯店に野菜を納めている農家の朴訥な青年高橋明（田中圭）。高橋が貴子に対して好意以上の気持を持っていることは明らかだが、さてその展開は……？

訓練中は誰にでも失敗はつきもの。また「失敗は成功のもと」と誰でもわかっている。しかし、金沢市大野町で毎年開催される謝恩料理会に、高橋に勧められるまま、王さんに代わって出場した貴子の失敗は、取り返しのつかない大変なことに。さてその失敗とは？ そして貴子はその失敗から立ち直れるの？

## 紹興酒あれこれ

「小上海飯店」を舞台とした人間ドラマを目指したこの映画は、静かなシーンを淡々と繋いでいくから、説明的部分が少ないのが特徴。したがって、舞台が突然私が数日前に訪れた上海の超高層ビルのシーンになるとビックリ。

今王さんは1人の女性ガイドを連れて、貴子を自分の生まれた故郷紹興に案内しようとしていた。紹興は2004年3月31日～4月3日に私が娘と2人で参加した杭州のツアー旅行の際に、丸1日かけて訪れたところ。蘭亭や魯迅記念館も興味深かったが、紹興見学のメインは何といっても紹興酒製造工場の見学と試飲。

紹興酒の原材料はお米だが、その製造方法は門外不出で、絶対の秘事項。したがって、ホンモノの紹興酒は紹興でしかつくることができないとの説明だった。また、私たち日本人は温めた紹興酒に砂糖を入れて飲んでいるが、これは本場の人に言わせると邪道。そういう飲み方になるのは紹興の水ではなく、水の悪い台湾のものだからとのこと。こんな紹興旅行で仕入れた紹興酒に関する知識の他、この映画を観れば、紹興では娘が生まれると父親が酒を作って土に埋め、娘の嫁入りに合わせてみんなで祝うという習慣があることがわかる。

## 紹興への旅の狙いは？

故郷に戻り、思わぬ歓迎を受けた王さんは大感激だが、その歓迎会での王さんのセ

リフがこの映画の大きなポイント。それは村人たちから「隣の若い娘さんは……？」と聞かれた王さんが、「私の娘だ。私の自慢の娘だ」と答えたところ。もちろん、中国語の会話だから貴子には全くわからず、ガイドに「今何で言ったの？」と聞いたのだが、タイミングが合わず、ガイドから通訳してもらうことができなかった。しかし翌朝、王さんとの散歩を終えた後、ガイドから王さんの答えを聞いた時、貴子の目には思わず……。

王さんの紹興への旅の目的、それは自分のすべてを見せることによって、貴子に「あの事件」からの立ち直りと再スタートを期待したわけだ。王さんと紹興の村人との間に今なお残る素朴な人間としての結びつきや、王さんの自分に対する思いを理解した貴子は、これできっと立ち直ることができるはず……。

### 貴子の晴れの舞台は？

王さんくらいの年齢になれば、誰か1人くらいは「この人のおかげで……」という人がいるもの。それが、「社長さん」と貴子に紹介していた永田百合子（八千草薫）。その話を聞いて、「社長さん」とは男の人だと勝手に解釈していた貴子は、それが加賀友禅の工房を営むこんな上品な美女だと知ってビックリ。

百合子は王さんの旧友であると共に、古くから王さんの料理のファン。そこで、百合子が王さんに頼んだのは、跡取り息子が嫁を迎えることになったため、是非両家だけの食事会を小上海飯店でやりたいということだった。脳梗塞の後遺症のため中華鍋を握ることができなくなった王さんは、それを頑なに辞退していたのだが、ある日王さんに妙案が。それは、既に自分の娘だと考えはじめ、小上海飯店の跡継ぎだと決めた王さんにとっては当然の結論だった。さあ、紹興からの帰国後、従来に倍する王さんからの特訓を受けた貴子は、晴れの舞台で料理人としての腕前を存分に振るうことができるのだろうか……？

### 困ることが1つだけ……

この映画はたしかにいい人間ドラマなのだが、困ることが1つだけある。それは、次から次へとスクリーン上に登場するおいしそうな料理を、映画終了後何1つ現実には食べることができないこと。蟹しゅうまいは事前にたくさん仕込んであるはずだし、トマトの卵炒めは3分もあればできそう。また、値段もリーズナブルなことはまちが

いないから、できることならすぐに注文して食べたいのだから……。

この映画を観るについては、そういう欲求不満になることは覚悟しておいた方がよさそうだから、あらかじめアドバイスしておこう。

### 中谷美紀のしっとりとした演技に注目！

今や中谷美紀は、バイリンガル女優木村佳乃と並ぶ30代の演技派女優の双璧……？ とりわけ、『嫌われ松子の一生』（06年）のぶっとびぶり（『シネマルーム10』360頁参照）と『電車男』（05年）のお嬢サマぶり（『シネマルーム8』182頁参照）は特筆もの。また、『力道山』（06年）、『あかね空』（07年）、『シルク』（08年）など最近見せた演技もそれぞれすばらしい（『シネマルーム10』229頁、『シネマルーム14』312頁、『シネマルーム18』182頁参照）。

そんな中谷美紀が、『しあわせのかおり』では父と娘のストーリーを味わい深く演じている。もっとも、王さんと貴子はもともと赤の他人で、王さんは貴子が仕事上で接触しただけの料理人。しかし、同じく料理人だった自分の父親を思い出しながら、王さんの弟子になろうと決心した貴子が、心のどこかで思っていたものは……？ そんな貴子の思いは、紹興で王さんが村人たちに中国語で貴子を紹介した言葉を聞いた時、最高潮に……。そんな中谷美紀のしっとりとした演技に注目！

### 藤竜也のやさしい目線にも注目！

藤竜也といえは、若い頃は高島渚監督の『愛のコリーダ』（76年）や『愛の亡霊』（78年）で大きな話題を呼んだ俳優だが、最近『ミッドナイトイーグル』（07年）や、『窯焚 KAMATAKI』（08年）などで見せる年相応のしっとりとした味が特徴。

この映画で彼は中国人の王さんに扮し、多少訛った日本語（？）を使っているが、基本的には口数の少ない、いかにも頑固そうな料理人。しかし、王さんが貴子に対して注ぐ目線が次第にやさしく、かついとおしそうになっていくのが印象的。この映画ではヒロインの中谷美紀だけではなく、そんな円熟した藤竜也の演技にも注目！

2008(平成20)年8月30日記